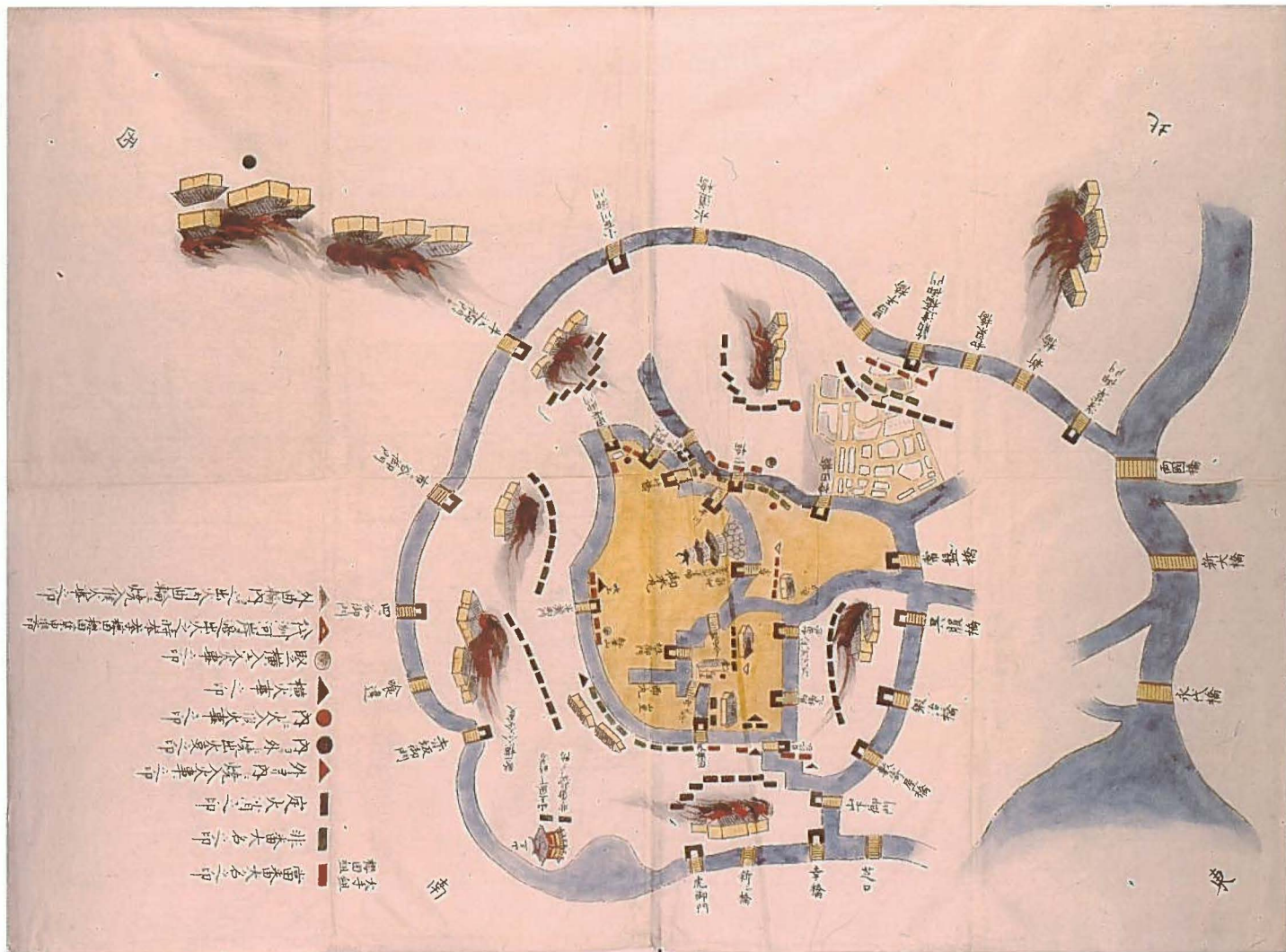




武家火消による江戸城火災防御線図（消防博物館 所蔵）

表 江戸城の主な建物の焼失歴

天 守：明暦3年（1657）
その後非再建
本 丸：寛永16年（1639）
明暦3年（1657）
弘化元年（1844）
安政6年（1859）
文久3年（1863）
5度焼失、その後非再建
西の丸：寛永11年（1634）
嘉永5年（1852）
文久3年（1863）
3度焼失
二の丸：明暦3年（1657）
延享4年（1747）
文久3年（1863）
慶応3年（1867）
4度焼失、その後非再建
三の丸：明暦3年（1657）
その後非再建

江戸城の構成略史

1. 江戸城周域の概観

秀吉による小田原攻めの後、家康は関東転封を命じられ天正18年（1590）に江戸城に入り応急修理をして西の丸を建設した。関ヶ原の戦いの後、各地で小競り合いが続く不安定な情勢の中、家康は慶長8年（1603）に幕府を開き江戸市街地の改造と城郭の構築に力を注いだ。勿論、市域や城郭は防衛と同時に反撃に適した構成とすることが第一義であった。

まず行った市域の拡張では、江戸前島に道三堀を開削し、小名木川・新川運河の建設による発生土砂で堤防を造り、戦略必需品である行徳塩の安定輸送路とした。また、小石川・平川を道三堀へ導入する発生土で日比谷の入江を埋め立て市域拡大に努めた。入江の

埋め立ては、敵船団が直接城際接近するのを避ける意味もあった。それに代わる輸送路として常盤・呉服・鍛冶・数寄屋の各橋を通る濠が前島を開削して造られた。

2. 城郭の構成

天守閣跡の石垣などがある現在の皇居東御苑（31ha）には、本丸・二の丸・三の丸があり、將軍の政務・生活の域であった。また、北の丸（現在の北の丸公園、武道館・科学技術館などがある。19.3ha）、西の丸（二重橋・新宮殿・宮内庁などがある。22.6ha）、吹上御所（現在の御所・伏見櫓などがある。35.8ha）、西の丸下（皇居外苑、現在の皇居前広場11ha）を加えて、江戸城の総面積は約119.7ha（1.20km²）であった。

（絵図の解説は次頁）

絵図の制作年代

この図は、肉筆で江戸出火時に江戸城を火事から護るための大名や定火消の配置を示したものである。残念ながら、製作者や製作年代は不明だが、以下のことが分かる。

まず、隅田川(大川)に架かる橋をみると、江戸大改造のきっかけとなった明暦3年(1657)の大火の惨状を教訓として架けられた、両国橋(万治2年(1659)あるいは寛文元年(1661)の2説あり)・新大橋(元禄6年、1693)・永代橋(元禄11年、1698)が描かれている。また、大名火消が誕生したのが寛永20年(1643)、定火消は万治元年(1658)の発足であることを考えれば、この図は明暦大火の後のものということになる。

さらに、見付の数は外曲輪に26、内曲輪に10とみて36といわれている(90程度あったとの説もある)。橋に見付門や見張り櫓が併設されているとした場合、この図にみる橋の数は36であり見付けの数と一致している。したがって、最後に設置された橋の作事年が分かれば、この図の製作年代を知る手掛かりになる。また、山王神社は明暦の大火で焼失したが将軍家綱により万治2年(1659)にこの図の場所に遷座していることも参考になろう。

大名火消・定火消の御城火事防御

安政3年(1855)の江戸図も参考にすると、神田川(平川)に架かる神田橋の右北方には白壁町や鍛冶町などの名称に見る町人や職人のまち、左北方には広大な大名屋敷が展開し、その南方には酒井家などの譜代大名屋敷を経て幕府諸施設の中で最も重要な本丸に入る大手門が控えている。

この図では、筋違橋御門の南側には当番大名や定火消が三重に配置されており、同様の状況を勘案して描かれたとも推察される。同じく一ツ橋から水道橋に至る北西の方向には小規模士族の屋敷が密集し、東南方向には本丸天守閣跡(明暦の大火で焼失しているためシンボリックに描いていると考えられる。)が近い。定火消が屋敷群の中程に、当番大名火消が一ツ橋門の神田川北岸に沿って配されている。呉服橋・鍛冶橋・数寄屋橋の堀筋と和田倉門・馬場先門の間、虎の門・新橋の堀筋と外桜田門・日比谷御門堀筋の間や日比谷堀の対岸にも大名屋敷が立ち並ぶ状況から、西の丸御殿を防護する定火消や当番・非番大名火消が外曲輪から内曲輪への焼込みや縦横入交る火事を防御す

るために幾重にも配されたと考えられる。

このように明暦の大火後にも防御ラインを多くの場所に多数配置せざるを得なかったことは、大名や幕臣の屋敷を玉突き的に移転させたり、町屋を撤去したりしても、江戸の活気は益々旺盛になって行き火除け地には店や住宅が増え、防火堤も切崩されて行ったためと考えられ、そのことがこの図からも読取れるように思われる。徳川の世の267年間で火災は1,798件、年間約7件の火事が起こり、幕末の頃は年間約30件に増えた。激動の世になり財政的逼迫も絡んで火氣管理が手薄になって行ったためであろう。

江戸城の火事対応

城内の御殿や門櫓などは木と紙でできた開放的な大建築であり、御目見えや評議の場である大広間、薪炭を使う台所、城内各所に設置された行燈などを勘案すれば、一端火を失すればボヤで済むか全焼になるかのどちらかであったと言っても過言ではないだろう。江戸城に関わる火災を諸本からチェックしてみると約35件あり、このうち自家出火がおおよそ15件で、台所出火は5件、うち3件が全焼に至っている。大奥の職制には「御火の番」があり、一日中何度も各部屋を巡回し火の元に注意する役であった。

この絵図のように当番制の大名火消や定火消は、さまざまな火事から江戸城を護るために配され、定火消役となった4,000石以上の旗本4家には火消屋敷が与えられ、旗本は与力6騎・同心30人・臥煙100人を引き連れて火事場へ向かった。

後になって、町火消も城内火災の防御に駆付けることが求められた。火消活動は破壊消防であり、鷹口や刺股が使われた。鷹職人は建物構造に詳しいため家屋の引き倒しや取り壊しがスピーディーであり重宝がられた。天明2年(1782)オランダから改良竜土水がもたらされたが水鉄砲や玄番桶と同様、盛り火に対し消火効果はなく、専ら纏持ち、猫頭巾、刺子衿纏などを濡らすために使われた。火の粉払いには大団扇や海草で出来た水筵を水箱で濡らして使った。

なお、特筆すべきことは火災で焼けた建物の再建の速さである。主な建物の焼失歴は表(前頁)の通りで、多くは焼失後、1～2年で元の姿に再建されている。

菅原 進一(東京理科大学 教授)